

Title	Khaṛī BolīとKauravī : "Devarānī Jeṭhānī Kī Kahānī"を介して
Author(s)	古賀, 勝郎
Citation	大阪外国語大学学報. 33 p.51-p.63
Issue Date	1975-01-31
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80540
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Kharī Bolī と Kauravī

—“Devarānī Jeṭhānī Kī Kahānī” を介して—

古 賀 勝 郎

खड़ी बोली और कौरवी

- "देवरानी जेठानी की कहानी" में -

पं० गौरीदत्त रचित "देवरानी जेठानी की कहानी" (सन् १८७० ई०, मेरठ) का पुनर्मुद्रण (गंथ निकेतन, पटना) सन् १९६६ ई० में हुआ। इसके प्रकाशन में डा० गोपाल राय का बहुत बड़ा हाथ रहा। उन्होंने इस के पुरोक्चन में "देवरानी जेठानी की कहानी" को हिन्दी का प्रथम उपन्यास सिद्ध करने के लिए विस्तारपूर्वक विवेचन किया था। फिर उन्होंने "नागरीप्रचारिणी पत्रिका" (काशी, वि० २०२३, अंक २, पृ० २१९ - २२२) में "शुद्ध खड़ी बोली का एक प्राचीन रूप" शीर्षक निबंध छपवा कर इस "कहानी" की भाषा का विवेचन भी किया था।

अपने निबंध में डा० गोपाल राय ने इस "कहानी" की भाषा को उस समय (१८७० ई० के आसपास) मेरठ जिले में प्रयुक्त खड़ी बोली का शुद्ध रूप मानकर इस भाषा की रचना का विश्लेषण किया था। उनके विश्लेषण का सारांश इस प्रकार है :-

(१) यह कृति सन् १८७० ई० के आसपास मेरठ जिले की आम जनता में प्रयुक्त भाषा में लिखित है, अतः उस जिले में प्रयुक्त खड़ी बोली के शुद्ध रूप की खोज के लिए इसका बहुत बड़ा महत्त्व है।

(२) तत्सम शब्दों का प्रयोग इसमें नहीं के बराबर है, जबकि आधुनिक हिन्दी में तत्सम शब्दों का अनुपात बहुत अधिक होता है।

(३) इसमें स्थानीय शब्दों के अत्यधिक प्रयोग हुए हैं जो परिनिष्ठित हिन्दी में स्वीकृत नहीं हुए।

(४) क्रियापदों के प्रयोग भी परिनिष्ठित हिन्दी से भिन्न है। निश्चयार्थ सामान्य वर्तमान काल, निश्चयार्थ अपूर्ण भूतकाल, आजार्थ, पूर्वकालिक कृदंत के प्रयोगों में विशेषता है।

(५) विभक्ति प्रयोग भी आधुनिक हिन्दी से भिन्न है।

(६) वचन प्रयोग की दृष्टि से भी इस "कहानी" की भाषा में विशेषता है।

(७) इस "कहानी" की वर्तनी भी आधुनिक हिन्दी के प्रयोग से भिन्न है।

(८) यह "कहानी" हिन्दी के अविकसित गद्य का उदाहरण है।

इन पंक्तियों के लेखक की दृष्टि में डा० गोपाल राय का विवेचन अत्यंत संचिप्त है और विश्लेषण अधूरा रह गया है। प्रस्तुत निबंध में लेखक ने इस "कहानी" की भाषा के ध्वनि एवं रूप दोनों पक्षों पर विचार किया है। विशेषतया उन्नीसवीं शती की खड़ी बोली की रचनाओं की भाषा तथा कौरवी के संदर्भ में विवेचन करने का प्रयास किया गया है। इस "कहानी" के शब्दों, मुहावरों एवं कहावतों के प्रयोग की विशेषता पर लेखक का दूसरा निबंध प्रस्तुत है। (जर्नल ऑफ़ इण्डियन एण्ड बुद्धिस्ट स्टडीज़, खण्ड २३, तोक्यो, १९७५)

डा० गोपाल राय के निबंध में "खड़ी बोली" की परिभाषा अस्पष्ट है। उन्होंने लिखा है, "खड़ी बोली मूलतः मेरठ जिले के आसपास की भाषा है। अतः खड़ी बोली के मूल रूप को जानने के लिए "देवरानी जेठानी की कहानी" का अध्ययन महत्वपूर्ण है।... यह एक उल्लेखनीय तथ्य है कि प्राचीन खड़ी बोली गद्य के उदाहरण तो अनेक मिलते हैं, पर मेरठ जिले में प्रयुक्त खड़ी बोली के शुद्ध रूप के नमूने प्रायः नहीं मिलते।" (पृ० २१९)

यह तो सर्वविदित है कि "खड़ी बोली" शब्द का प्रयोग निम्न दो अर्थों में हो रहा है अर्थात् (१) मेरठ-दिल्ली के आसपास की क्षेत्रीय भाषा, (२) ग्रामाणिक हिन्दी, उर्दू तथा हिन्दुस्तानी की आधार भाषा। प्रस्तुत निबंध में लेखक ने अस्पष्ट प्रयोग से बचने के लिए प्रथम अर्थ की "खड़ी बोली" को कौरवी के नाम से अभिहित किया है।

इस "कहानी" की भाषा की विशेषता प्रगट करने के लिए तत्कालीन खड़ी बोली के स्वरूप को स्पष्ट करना आवश्यक है। साथ ही खड़ी बोली और कौरवी के संबंध अथवा अलगाव को भी ध्यानपूर्वक देखना चाहिए।

略

号

AK Badrinārāyaṇ Caudhri 'Premghan', "Ānand Kādambini", Mirzāpur

DJ Gauridatt, Devarāni Jēṭhāni Ki Kahāni, Merāṭh, 1870 (Gopāl Rāy, Gauridatt Kṛit Devarāni Jēṭhāni Ki Kahāni, Patna, 1966)

HM	Bhāratendu Hariścandra, “Harishcandra Magazine”, Banāras
HP	Bālkriṣṇa Bhaṭṭa, “Hindi Pradip”, Ilāhābād
K	Kauravī (Vernacular Hindusthani)
KB	Khari Boli
PG	Śrinivāsdās, Parikṣā Guru (Punarmudraṇ), Delhi, 1958
Pin	Frederic Pincott, Hindi Manual, London, Seventh ed.
VA	Rājā Śivprasād, Vidyānkur, Lakhnau, 1889

I

- (1) KB の二重母音 ai, au が, K ではそれぞれ e, o といった単母音に発音される傾向がある。これは南部 K に特に強く見られる傾向である⁽¹⁾。DJ にはこのような特徴を示すようなものは文字上は見られない。hai, baiṭhe; aur, gaunā
- (2) KB のアクセントのない音節の i 音が K で a 音に変わったり⁽²⁾, アクセントのない語頭母音が略されることがあるが, それらは DJ には見られない。śikāri, miṭhāi, ab, ikaṭṭhā はそれぞれ sakāri, mathāi, ib, kaṭṭhā とはなっていない。DJ には KB でアクセントのない語頭の a 音が DJ で i 音に変わっている例がある⁽³⁾。Pirāwathā (Parāwaṭhā)
- (3) KB の語中のそり舌ふるえ音 r 及び r̥h が K ではしばしばそり舌閉鎖音として現われる⁽⁴⁾。この傾向は西部 K に顕著である。DJ では barō, gāri, larī のようにそり舌ふるえ音として見出される。
- (4) KB の語中及び語末の歯茎側音 l が, K ではそり舌側音で現われる。そり舌側音を表わす文字が普通には KB の書写に用いられないことも考慮しなければならぬが, DJ にはこの傾向を示すものは見出されない。
- (5) KB 語中や語末の歯茎鼻音 n は西部 K ではそり舌鼻音 ŋ で現われる傾向がある。⁽⁵⁾ DJ には現われていない。
- (6) KB のアクセントのある長母音に続く子音は K では重子音として現われる傾向がある⁽⁶⁾。西部 K に一段と強い傾向であるが, DJ には見られない。
- (7) 外来音 f, z, q, kh, gh が K では現われない⁽⁷⁾。DJ についてみると, q, kh, gh はそれぞれ ka, kha, ga の文字に下点を付した KB 形では現われていない。z 及び f については, 次のように文字上区別のあるものとないものとの 2 種が見られる。taraph, cij, ; fajitā, hazār
- (8) K には無声口蓋歯茎摩擦音 ś は現われない, とされるが, DJ には nauśe, śahar, kuśal などの例が見られる。ただし, このような例が外来語もしくはタトサマ語彙であるのに対し, ās(望み), sāśū(しゅうと)などのタドバヴァ語彙の例をみると歯茎摩擦音化(ś→s)の傾向が認められるので, 語源意識から nauśe などと書かれたが, 実際には nause などと発音されたことも考えられる⁽⁸⁾。また, KB においてはそり舌摩擦音(ś)は歯茎摩擦音化しているが, DJ ではやはり文

字上はそり舌音として現われている。viṣṇu, varṣ これも語源意識によるものと考えてよからう⁽⁹⁾。

(9) DJ にも歯唇摩擦音の両唇閉鎖音化の傾向が強い⁽¹⁰⁾。biruddh, bivāh

(10) 次のように DJ にはタトサマ語彙やアルダ・タトサマ語彙が見られるので、著者が描こうとした地域やコミュニティに見られる音韻を DJ が忠実に写しているとはいえない⁽¹¹⁾。kṣem, auṣadhi, Vṛiddhi, Pārvati; Punyadān, biṣay, brit, Pārbati

(11) 以上の他に若干の例ながら KB と異なるものとして次の諸点を示すことができる。

① 語中の軟口蓋閉蓋無気音が DJ において同有気音化しているものやその逆のもの⁽¹²⁾。
ikaṭṭhi-ikhaṭṭhi, dhokhe-dhoke

② 語中の歯茎口蓋閉鎖無気音が DJ において同有気音化する。khiçṛi-khiçṛi

③ そり舌ふるえ無気音が DJ において歯茎ふるえ音として見出される。bhīrti-bhīrti

④ ③の逆の場合も見られる⁽¹³⁾。ughar gayā-ughar gayā

⑤ 語中のそり舌ふるえ有気音が同無気音化する。この逆の場合もある。ārhat-ārat; karāhi-karhāi

⑥ 語末の有気音が無気音化する⁽¹⁴⁾。grihasth-grihast

⑦ ra で始まる語末の閉音節において、その母音 a が失われることがある。parac jāegā-parc jāegā, taraf-tarf

⑧ 語中の母音が鼻音化することがある⁽¹⁵⁾。khilaune-khilaūne

(12) 文学作品、あるいは、啓蒙書としての制約から DJ について音韻的吟味するには多大の不都合がある。しかし、そのような制約や不都合を考慮に入れてもなお、DJ に見られる音韻の特徴は K のそれをごく一部しか反映していない。少なくとも西部 K の要素はほとんど見られないといえよう。DJ に見られるものは東部的要素というか KB のそれに非常に近いものである。

(13) なお、綴字法の上では今日のそれと若干差異も見出されるが、同時代のものと比べると大差ない。ただし、句読点については、いわば完全なほどの句読点を施した PG には比すべくもないが、HP や HM などその他のものと比べても甚だ不備であった。句読点、段落の表示は皆無と言ってよいほどでありその意味では全く伝統的な書法に依っている。

II

1—(1) 名詞の性についてみると同時代の作家のものにかなり多数の混乱が見られるのであるが、⁽¹⁶⁾ DJ にはわずかに次の 2 例が見られるのみである。tumhāri kṣem kuśal, kitne kitne gārī hohai

(2) 名詞の語形変化について見ると、性に関係なく KB と同じ変化をする場合①と KB では今日標準的でない変化をする場合②とがある。

②は次のような場合である。(A) 数詞などによって複数の意が明らかな場合、直格形であれば

複数形をとらぬことがある。(ただし、述部は複数形になっていることが多い。) *do cār bāt, do sau pustak mol lī, cārō khatti bec dī, kitnī bahilī jāyāgi* これは同時代及びそれ以前の KB 並びに Braj などにも等しく見られるところである⁽¹⁷⁾。(B) *-ī* 語尾女性名詞の直格複数形に *-iyā* 形と並んで *iyē* 形もひんぱんに見られる。*moṭi moṭi roṭiyē, laṛkiyē hai, striyē rowē, pāc sāt laūḍiyē* これは同時代にパンジャブ、デリー方面においてもひろく行われていた⁽¹⁸⁾。

同時代のものにはこれら以外にも数や格にわたり不規則な例が見られるのであるが、DJ にはそのような点は見当らない。⁽¹⁹⁾

(3) 同時代の KB ヒンディーにおいては、*-gaṇa, -jana, -vrind, -jāti, -samūh* などの語は単数形に加えた複数形がしばしば見られるが、⁽²⁰⁾ DJ にはその例は皆無である。これはタサマ語彙の使用度及び使用態度と関係があるものと考えてよからう。ただし、*log* を用いた例は一つ見られる。*musalmānō aur sāhab logō mē*

(4) アラビア語・ペルシア語式の複数形の例は全く見られない。これはウルドゥー系語彙の多用並びに高級語彙の使用とかかわることである。DJ にはそのような意味でのウルドゥー系語彙の多用は認められず、また高級語彙も少ない。⁽²¹⁾

2-1(1) 1人称代名詞としては KB と同じものが DJ にも用いられている。*muje, maje, mhārā* などの例は全く見られない。実際は女性単数に *ham* が用いられた例がある。*ham kyā chāti par rakhkar le jāyāge* ただし、常にこの形で現われるわけではない。同一人物が同一の相手に *mai* と述べている。また、*ham* は今日の KB と同じく男性単数にも用いられている。*tum hamē apne akhbār ki khabarē sunāo* (夫→妻) 複数の意を明確にするために *ham log* となる例は見られない。⁽²²⁾

(2) 2人称代名詞としてもやはり KB と同じものが用いられており、K 固有の *tuj, tujhe, thārā* などの例は全く見られない。⁽²³⁾ *tū ne* に相当するものとして、*taī ne* が見られるが、これは K 固有の形であり、PG にも Braj にも見られる。⁽²⁴⁾ *tum* は *log* を従えずに複数の意に用いられている。⁽²⁵⁾ 2人称尊敬代名詞 *āp* は見られない。⁽²⁶⁾ なお、再帰代名詞としてはやはり KB と同じ *āp, apnā* が用いられている。

(3) 3人称兼指示代名詞はやはり KB と同じであるが、次のような特徴が見られる。直格形においては、単・複同形である。*wah kaṭi; wah bhī kahē the we* 及び *ye* といった複数形は見られない。⁽²⁷⁾ *log* を付した複数形の例はなく、*inhō ne, unhō ne* のように代名詞のみで複数が見わさされている。*usne, isne* の意の *un ne, in ne* の例はない。⁽²⁸⁾ *yehi terī mā hai, yehī bāt* などの例があるが、これは KB の *yahi* の意に用いられたものである。K 形の *ū, oh, o, wā wis, yū, yo, ye, yā* などは全く見られない。

(4) 関係代名(形容)詞としては KB と同じ *jo, jis-, jin-* が用いられており、単数直格形に K 形の *joṇ* は見られない。⁽²⁹⁾

- (5) 相関代名詞としての so は相関詞としては全く用いられず、接続詞的にのみ用いられている。⁽³⁰⁾ mai bhābhi ji se milne gurḡāvē gayā thā so wah pūchē the; tis par bhi
- (6) 疑問代名(形容)詞としては、KB と同じ kaū, kis-, 及び kyā, kāhe- が用いられており、K 固有のものは全く見られない。
- (7) 不定代名(形容)詞としては、koi, kisi-; kuch が用いられており、ko, kucch は見られない。⁽³¹⁾
- (8) その他、次のような代名詞が見られる。sab, koi nā koi, kuch na kuch, jo koi, jo kuch いずれも KB に見られるものである。

3—(1) 格後置詞としては KB 形と同じものが用いられているが、次のように K 形も併用されている点に特徴がある。⁽³²⁾

- (2) kis ne, tum nē, -nai は見られず、PG ではすべて nē。
- (3) ko と並んで K 形の kū がかなりひんばんに用いられている。iskū to tum vakil banānā; uskū is bāt kā baṛā hī dhyān rahtā しかし、K 形の -ne, -ne が ko に代用される例はない。
- (4) se のみが用いられており、K 形の sū や PG に見られる sai は見られない。
- (5) 属格の kā-ke-ki の用法は KB と全く同じ。
- (6) mē, par の用法は KB と全く同じであるが、さらに K 形の pai が用いられている。par と pai とでは後者のほうがはるかに多く用いられている。また, jis pai jaisi āti hogi とか is pai sinā pirōnā bhi āwe hai などのように KB では ko を用いる個所に pai が用いられている⁽³³⁾。
- (7) KB におけると同様、格後置詞が連続して用いられている。ghar mē se bhagā jātā; desi timanjile par se; ākhō mē kā surmā
- (8) 格後置詞の省略は KB におけると同じく時間・方角・位置・目的などを表わす場合しばしば見られるが、次の例における省略は今日の KB においては標準的なものとはされない。bāp ke ghar (～) kiye nahī the; kisi ne gahne ki lālac (～) galā ghoṭke kue mē ger diyā

4 形容詞の用法は KB と同じである。代名形容詞に itnā などの KB 形と並んで utte bairi のように K 固有のものが見られるが、このような併用は当時の KB においても標準的なものであった。⁽³⁴⁾ 数詞は若干の例ながら基数詞・序数詞ともに KB 形と同じ。⁽³⁵⁾ タトサマ語彙の使用と関ることであるが、これにはサンスクリットの形容詞女性形⁽³⁶⁾の例は見られない。

5—(1) 不定詞・現在分詞・過去分詞はいずれも KB と同じ構成で、K 固有の -aṇ, -nā; -ttā; -yā 形のものは全く見られない。ただし、今日ウルドゥー的語法の一に数えられる ān pahūcā のような例は見出される。⁽³⁷⁾ また、-an 形の不定詞が名詞的に用いられている例もある。daswē din nhān dhowan huā

不定詞及び両分詞の機能はやはり KB と同じである。⁽³⁸⁾ ただし、語根が母音でおわる一部の動詞の過去分詞は次のように -wā を加えてつくられる。āwe the (āye the); pāwe (pāye)

(2) 使役形も KB と同じ構成であるが、+ -ā の第一次使役形にかえて、+ -lā 形も見られる⁽³⁹⁾。kisi ko likhnā paṛhnā sikhlati また、第一次使役形が第二次使役形の意に用いられた例がある。apne choṭe betē ko angreji paṛhāo

(3) 接続分詞⁽⁴⁰⁾ も KB 形と同じく -kar, -ke 及び -karke を語根に付加する。

(4) ① 語根（接続分詞）との複合動詞には KB 形の同じものが見られるが、その種類は多くはない。

② 現在分詞及び過去分詞との複合動詞もすべて KB 形に見られるものと同じである。名詞との複合動詞⁽⁴¹⁾ には KB 形と同形のものもあるが、それと異なるものも見られる。yah...kahāni...bahādūr ko aisi pasand āi; bābū ko apnā likhnā dikhlāyā uski pasand āyā

③ 不定詞との複合動詞も次のように KB 形に見られるものとほぼ同じである。⁽⁴²⁾ angikār karnā parā; yah kām bhī karnā hī hai; mīthā bolnā cāhiye; ākhē dukhne ātī; jīne detī; māl āne lagā; ciṭṭhī patī likhni ājāegi; sarāhne yogya thī; laṛki bālā honewālā hai; ān baiṭhe

(5) 助動詞は KB に同じ。K の過去形 hā, tā は見られない。

(6) 命令法においては、le bol; mat kahā karo; likh bhejnā など KB 形と同じものが見られるほか、次のように KB に見られぬ例もある。

(A) 叙想法不定未来時制形が用いられている場合 beṭi rowe mat tujhe jaldi bulā lēge

(B) 2人称単数形に対応する未来命令形として K 形の -iyo, -ijo が用いられている場合⁽⁴³⁾ tū yahī rah; ghī ko take rakh chorīyo; khāḍ ke laḍḍū banā lijo これは2人称 tum にも対応するものとされるが、その例は見られない。

今日 KB において尊敬代名詞 āp に対応する -iye 形が、その意味で用いられた例はない。phir kyā kijie bahin laukik ke biruddh bhī to nahī kiyā jātā においてこの形のものが見られるが、“kiyā jāe” すなわち、kijie 本来の意味に用いられたものと解すべきである。たとえばこの種の用例は少し古くに目を向ければかなり見出すことができる。is se zyādah uski ta ‘arīf kyā kijie (Akhlāk -i- Hindi, London, 1868, p. 74); unke jhagre ko kis ṭarah faīsal kijiye (Ikhwānu-ṣ-ṣafā, London, 1873, p. 44)

(7) 直説法の時制の構成は KB と同じであるが、活用形についてみると KB 形と同じもののほかに K 固有の活用形⁽⁴⁴⁾ が併用されている。

現在時制形には detā hai と並んで mai lāū hū; āgreji paṛhe hai; ṭikā lag jā hai; tum kyā gajab karo ho; khāwē hai pahine hai hāse hai などが見られる。イスラム教徒が用いられるとされる ho jāy hai; khāwē hai と並んで paṛ jā hai; jāyā kare hai なども見られるので、この点での統一はない。また、この K 形のは、進行時相を表わしていることがある。choṭe

āwe hai (ā rahe hai) しかし、進行時相形は KB 形と同じものが別に見られる。なお、習慣性や反復性を強調する表現としては上とは別に KB にも見られるものがある。sikhlayā kare hai (sikhlayā karti kai)

(8) 習慣過去時制には yō kahte the のように KB と同形のもののほかに、次のように K 独自の形⁽⁴⁴⁾が用いられており、後者のほうが数多く見られる。dekhe thi (dekhti thi); khā le thi (khā leti thi) これはまた、過去進行時相を表わすことがある。rowe bahut thi (bahut ro rahi thi) このような用法は当時は一般的なものとしていた。過去進行時相のみを表わすものとしてはやはり KB と同じものが用いられている。なお、習慣性や反復性を強調する形はこれとは別に KB 形と同じものが見られる。⁽⁴⁵⁾ phirā kare thā

(9) 叙想法不定未来時制には man dukhe; kyā karē などの例にみられるように dukhai; karai といった形は見られない。⁽⁴⁶⁾ただし、語根が母音でおわる一部の動詞は、2・3 人称単数及び 1・3 人称複数形に音便として -w- をそう入する⁽⁴⁷⁾。pāwe (pāe), chipāwē (chipāē), banā lewē その他の叙想法各時制形は KB 形と全く同じである。

(10) 受動態は KB に同じ。sukhdei ko yah ciṭṭhi likhi gai 無人称態の例は見られない。

6 2, 3 方言的な特徴のあるものを除けば、副詞には K の特徴は明らかではない。⁽⁴⁸⁾

7 後置詞には KB と同じものが見られるが、その後ヒンディーかウルドゥーのいずれかにしか使われなくなったものがある点が注目される。⁽⁴⁹⁾ laukik ke biruddh; lālā dīn dayāl ke mār-
phat (mārfat); ākhō ke wāste; mātā ke santulya; samūci harō samet なお、wāste は
tumhāre bulāne wāste のように ke を介さずに不定詞の斜格形に接続した例もある。

8 接続詞としては、is kāraṇ, parantu, kintu, yadyapi…tathā, arthāt などヒンディー寄りのものがやや多く見られるのが特徴である。

9 接頭辞、接尾辞としては特に目立つものはない。わずかに parhi aur beparhi striyō mē; uski besalāh koī kām na kartā のような今日のヒンディーでは標準的なものとされない例が見られるのみである。⁽⁵⁰⁾

10 語順は今日ヒンディーに見られるものと大差ない。paisā rupayā tulāi kā iske hāth bhi lag jātā; ek āna mahsūl kā diyā hai などのような例が若干見られるが、Inśā Allāh khān の ‘Rāni Ketki ki kahāni’ や Lallū Lāl の ‘Prem Sāgar’ に見られる程度や度数のへだたりではない。

11 上に見てきたように、形態面では DJ には K の特徴が幾つかの点で現われている。しかし、それらの特徴は、いわば KB の中に散見される程度のものでしかなく、全体に一貫して見られるものではない。K 形と KB 形とが併用されている場合もある。また、今日の KB 形と異なるものにあっても当時の KB では通常のものでされていたり、複数の形態が併用されていたのが、その後選択・統一された結果、今日見られるものと異なっている場合もある。語彙・語法の面でもこのような点は見られるところであり、K や KB、とヒンディー、ウルドゥーの相互関係や史的展開を探る上で DJ は興味深い資料を提供している。⁽⁵¹⁾ KB Hindi 文法の確立に至る時期に著されているという意味の他に DJ には更にもう一つの意味合いでの考察も必要であろう。

III

今日、KB Hindi は Hariyānā から Bihār, Himācala から Rājasthān に至る広大な地域の公用語として、また、教育媒介語として機能している。Hindi がインドを代表する公用語として位置づけられている今日、上記の地域においてそのような機能を期待されるのは当然であるかに思える。しかしながら、さらに限られた地域の婦女子の啓蒙的読み物として著わされた DJ には上に見て来たようにわずかにせよ KB ヒンディーからのへだたりが見られる。これを語彙や表現法について見るならば、そのへだたりは少なからぬものとなろう。また、DJ が KB Hindi の母体となっている K の特徴をそれほど鮮明にしていない形で書かれていることも併せ考えねばならない。これは Bihār について、あるいは Rājasthān についてあてはめてみるならば、これらの地域において KB Hindi のみにそのような機能を委ねておくことに大きな問題点の存することは自明であるというべきだろう。さらにヒンディー語地域には数百年に亘る文学活動の歴史を持つ言語が幾つか認められる。国民の大多数がそのような自分たちの最も身近な言語による恩恵に浴することができぬのは悲しむべきことである。広大な国土、複雑な民族構成、多様な言語を持つ国家においては求心的・統合的要素が重視されるのは当然であるとも言えよう。だが、それがためにその構成員の最も基本的な権利が阻害されるのを是とすることはできないはずである。そうした意味合いでいろいろな段階での公用語や共通語が必要とされ機能することと日常生活の言語で教育を受け意思を表明できることは本来対立関係に立ってはならない。DJ の出版に助成金を与えた北西州学校教育局長 M. Kempson の意図が奈辺にあったかはさておき、このような言語での啓蒙書が書かれたことの意味は語史的な重要性とは別に甚だ大きいものといわねばなるまい。

註

- (1) PG には $au \rightarrow o$ の例は多数見出される。lōtti (lauṭṭi), mot (maut), cothā (cauthā) ただし、一律にそうなるわけではない。kaun si, daur gae PG には $ai \rightarrow e$ の逆の例が多数見られる。āgai (āge), jaisai (jaise) また、KB の o が au になる例も PG には多く見られる。これは $o \rightarrow o$, au という関係で見出される。ādmīyō ki, amīraū ko DJ においてもこの種の例が見られる。ārausi parausi (aṛosī paṛosi)

- (2) PG にはこれ、もしくはこれに準ずる例、すなわち、同位置の *i* ないしは短い *e*、もしくは長母音 *i* が *a* となっている例がある。Balāyat (vilāyat), mahnat (mēhnat, mihnāt), mayād (mī'yād)
- (3) 同種の例は PG にも見られる。ek kiroṛ (karorṭ) rupayā
- (4) PG には giḍgiḍā kar のような例が見られはするが、kapre, caṛhā など、そうでないのが普通である。
- (5) PG にもこの傾向は見られない。
- (6) この傾向も PG には見られない。
- (7) PG には不統一もあるが、文字上は ka, kha, ga, ja の文字に下点を付して区別がなされている。ただし実際の発音上は DJ の場合と大差なかったものと考えてよいだろう。
- (8) PG においても同種の例が見られる。muškē, paramēśvar, satyanās, śābās
- (9) PG にも manuṣya, puruṣottam といった例が見られる。
- (10) PG についても同じことがいえる。parbas (parvaś), biṣay (viṣay)
- (11) PG にも ṭhag vidyā, ṭhag bidyā といった例が見られ、同じ傾向を示している。
- (12) この関係は PG にも見出される。ukhtātā (uktātā)
- (13) PG にも sakṛi (sakri) といった例が見られる。
- (14) PG にもこの種の例は見られる。jhūṭ (jhūṭh)
- (15) PG にもこの種の例が見られる。nōkari (naukari), jhūṭhe (jhūṭhe) など。また、PG には語末の母音の鼻音化の例が非常に多数見られる。jānō (jāno), gahanē (gahane)
- (16) Bhāratendu Hariścandra のこの種の名詞の性の扱いに関する混乱については、いわばヒンディー文学の巨人としての BH を擁護する立場からの説明がなされてきている。(たとえば、Uṣā Māthur, Bhāratendu Ki Khaṛi Boli kā Bhāṣā Viśleṣaṇ, Vārāṇasi, Vi. 2028, p. 170 ; Vrajkiśor Pāṭhak, Bhāratendu Ki Gadya Bhāṣā, Ilāhābād, 1968, pp. 177, 181) しかし、この種の混乱は HP をはじめ同時代のヒンディーには数多く見られるところである。たとえば、HP(IV) からは次のような例を挙げることができる。tumhāra santān (12-4), kisi dūse qism ki beimāni (5-2), yah iske nāk ki bāl ho gai, (4-18), jawāb khāne ki ḍar se (3-14), musalmānō ne in āryō ke sāth kaisā bartāw kiyā aur kaisi pratiṣṭhā inki kiyā (2-4), āryō ne...is mē khoj aur taraqqi kiyā thā (2-19) DJ の kṣem kuśal の例に対し、inki kuśal kṣem (The Baital-pachisi, ed., by Duncan Forbes, London, 1874, p. 92) のような例のあること、また上記の santān や ḍar のように当時、男女両性に用いられていたものが、今日いずれか一方に用いられているという場合もあるので、これには史的な考察を加える必要もある。さらに、DJ や PG にはこのような混乱が殆ど見られないことにも注意を払わねばならないだろう。HM, HP, AK などに見られる混乱はそれぞれの書き手の出身地や母語と全く無関係ではないようであり、それに KB 文法の知識の不足や不注意などの原因が加わったものと考えてよいだろう。ついでながら、DJ には bhāt kā phikar (fikr) という例があるが、fikr はヒンディーでは今日女性名詞とされるが、ウルドゥーでは男女両性に扱われるものである。
- (17) たとえば、次のような例が挙げられる。do ciz aisi ikatṭhi hō (VA, p. 64), do cizō kā āpas mē milnā (VA, p. 65) is rājā ki sau rāni thī (HM, p. 62) Pin は “After a numeral the singular form is preferred in the nominative and accusative.” (p. 122) と述べ、複数斜格の例 do vastu mē を挙げているが、DJ には複数斜格形の例は見られぬ。
- (18) PG においても、この種の複数直格形には ciṭṭhiyā, ciṭṭhiyē; ṭopiyā, ṭopiyē のように2通りの変化が見られる。Pin はこれについて次のように述べている。“Feminines in -i, at times, are made to form the nominative plural in four ways, at the option of the speaker; e.g. lakṛi, lakṛin, lakṛiyen, or lakṛiyān.) Of these lakṛiyān is generally considered the most correct. In the panjab, and even as far as Delhi, the best nom. pl. form of lakṛi, is held to be lakṛiyen;) (p. 12) ここにはいわば KB 形と K 形が列挙されているわけであり、実例から帰納された文法ではこのような記述と

なったのであろう。Bālmukund Gupta は、1905年に “Rājasthāni Samācār” 誌の言葉の悪い例として、この種の変化形 (galtiyē, bhūliyē, striyē) に言及している。(Gupta Nibandhāvali, Calcutta, Vi. 2007, p. 359)

- (19) たとえば AK には次のような例が見られる。guriyāō ki tarah (6-22), ciṛiāyē (4-5-13), duniyē mē (3-15) また、HP には dhuā̃ ke gubār sā (11-24) のような例も見出される。
 - (20) この類の例は HP や HM に多数見られる。Veśyājanō ki riti(HP2-11), kavivṛind(“ , 3-7), indriyagan unki sab sithil hogaĩ (HM, 47), anek Pakṣisamūh kriṛā karte the (“ , 87)
 - (21) この種の語彙が比較的多く用いられている HP にこの種の複数形が見出されるのも不思議ではない。kisi manuṣya ke khayālāt (khayālāt) (10-3)
 - (22) 当時すでに ham log という複数形がかなり広く用いられたが、同時に ham のみでも複数形に用いることが普通に行われていた。...yadi sarkār ko sacce ji se ham logō ki bhalāi manjūr hai to aisā hi karne mē ab kalyān hai nahī to yah ūpar ki cikni cupṛi bāt hi bāt hai ki ham hindustān ko sudhār rahe hai (HP, 5-7)
 - (23) HM (tumāri yād, tumē) や AK (tumai, tumārā) には -mh→m の例が見られる。
 - (24) HM には tai ne の例が見られる。tai ne kyā kiyā (p. 50)
 - (25) ham と ham log との関係はこれについてもいえる。musalmān bhāiyo tumko ab isi deś mē rahnā hai (HP, XXII, 5-13)
 - (26) āp の使用は当時一般的であった。複数形としては āp log (HP, 4-4) が用いられているのは今日と変りないが、HP (22, 5-13) には単独で複数の意にも用いられている。ab āp kṣamāsil ho unhē kṣamā kijiye AK にはこれに対応する動詞が tum に相当するものをとった例がある。āp ise angrezipan kyōkar kahte ho (1-3, 19)
 - (27) 当時は wah, we, we log; yah, ye, ye log の3段階が用いられていたが、wo [wah] (PG, p. 182), wah log (PG, p. 178) といった例も見られるようにこれら3段階の区別は不動のものではなかった。VA には次のような例が見られる。jinkā bigar jātā hai wah kuch nahi sunte aur bahre kahlāte hai (p. 23), we donō kism ke (p. 14) HM にも次のような例がある。wo kon āyā (p. 125), ye bāt nai nahī hai (p. 125), ye log (p. 19), we hi log (p. 186)
- なお、19世紀初にはウルドゥー、ヒンディーを問わず、yah, ye; wah, we と単・複を区別する用法がひろく見られた。もっとも、ウルドゥーでは単数形が複数の意に用いられることも珍しくはなかった。wah rone dhone lage (M. Husain (ed.), Bāgh o Bahār, 1958, p. 142) しかし、D. Forbes は単・複を明確に区別している。(A Grammar of the Hindustani Language, London pp 37-38) ところが, Platts は, yēh, wōh, wo が複数形にしばしば用いられ、北部のムスリム及びウルドゥー学者に好んで用いられるのに対し、ye, we はヒンディーに用いられる、と述べている。(p. 119)
- (28) Bāgh o Bahār などでは複数形を明確にするため、複数形には unhōne を用いている。unhōne jāwāb diyā ki “ham wāqif nahī” (p. 167), unne (jogi ne) qalamdān mujhe dekar kahā “sāth calo” (p. 108) また、この意の unne, inne は Platts には us ne, is ne 形と併記されている。(pp. 117-118)
 - (29) 当時、jo と jo log とが並んで行われていた。AK には ki jo という形が見られる。ab is se adhik aisi kaun si bāt hai ki jisai tum cāhti ho? (6-7) HM には jin と並んで jinh という古形も見られる。
 - (30) 相関代名詞が wah で代用される傾向はすでに一般的なものであり、慣用的表現に用いられる程度であった。ただし、特定の個人のものに多用されていることがある。(HM, p. 50) 接続詞的にはかなり用いられていた。また、関係代名詞に先行されずして用いられている例も若干ある。candū sāhi jāt kā khatri patśāh kā diwān thā tisko ek kanyā thā (“p. 50)
 - (31) VA には koi を重用して複数扱った例がある。koī koī machli bahut sundar balki sunahale rupahale rang ki hoti hai (p. 16)
 - (32) PG には, nē, sai, mai などが見られる。HM には kū̃ 及び pai が例外的に用いられている。sanvaran

- kū dekh (p. 125), bāt kis pai dekhī jāwaigī (p. 164) HM には KB 形と同じでありながら今日の用法と異なるものが散見される。us par kṣamā karē (p. 63), samkṣep se likhā (p. 63)
- (33) これは par の次のような用例と関連あるものであろう。kisū par ma'alūm na ho (p. 137). merā bhed ab is par khul gayā (p. 164) Mir Bahadur Ali, *Akhlāk-i-Hindi*, ed. by Syed Abdoollah, London, 1868
- (34) John T. Platts, *A Grammar of the Hindustani or Urdu Language* (6 th Impr. p. 128) を参照。
- (35) HM には chatvē adhyāy (p. 7), HP には navavā vārṣikotsav (XXII, 1-16) のような、今日標準的なものとされない形が見られる。
- (36) これは当時のヒンディーのかかなり多くの作品に見られる傾向である。被修飾語もタトサマ語彙であるのが普通である。urvarā bhūmi (HM, p. 186), vivāhitā stri (PG, p. 283), dayā yogyā bālikā (AK, p. 22)
- (37) Bholānāth Tiwāri, *Hindī Bhāṣā*, Ilāhābād, 1966 (p. 230) を参照。これは19世紀においては主動詞が語根形（正確には接統分詞形）となる複合動詞と並んで用いられたものである。HM にも mahāmoh niṣa ān pahūci (p. 187) 見出される。しかし、PG にはこの種の例は見られぬ。
- (38) 当時、これらの用法が今日のように安定していたとはいえない。次のような例を挙げることができる。usko rotī dekhkar uske chōṭe chōṭe bacce bhī ro rahe the (PG, p. 271), bātcit karte mē bhī merī ākhō ko dekho (HM, p. 54), ghabrāye saī kyā hotā hai (HM, p. 163), lālā brajkiśor ke gae piche (PG, p. 145). yārō ko diwānā banatī hūī anarth macātī rahtī hai (AK, 1-2, p. 6)
- (39) PG には yād diwāī (p. 107) といった例が見られる。
- (40) 当時はまだブラジ・パーシャの接統分詞が KB 形と並び用いられていた。koī khāy khel sab tarah kā sukh dukh jhel tab prayāṇ kartā hai (HP, 22-1, p. 14), unke hriday ke tāp ko mitāy diyā (AK., 1-3, p. 9), muh dhoy (HM, p. 33)
- (41) 名詞から成る複合動詞はタトサマ語彙の多用により増加することは、次の HM の例からも知られよう。uskā kuch vrittānt varṇan kijie (p. 20), candramā ast ho gae (p. 47), param amṛita svarūp vākya śrīmukh se āgyā karte hai (p. 75)
- (42) 不定詞との複合動詞において、不定詞が目的語の性・数に必ず一致するのがヒンディー式であり、一致が任意ないしは性のみに一致するのがウルドゥー式とされるが、DJ においては性・数に全く一致している。(B. N. Tiwāri, *Hindī Bhāṣā* p. 230) PG には cāhiye の未来形とともいうべき例が見られる。ussai jāwābdihi karnē ke liye bhī rūpe cāhiyēge (p. 107) yogya による表現は今日では古形になっているが、当時は一般的であった。HM には wah dev kā sthān aur jāti kā vicār karne cāhtā thā (p. 57) という例があるが、当時においては標準的な形とされていた。(Platts, p. 179) AK は -wālā と並んで -hārā も用いている。bhaviṣya mē honehāre hamāre deś ke samast santān (1-6, p. 6)
- (43) Platts (pp. 136-7) も Pin (pp. 149-150) もこれを tū 及び tum に対応する未来命令形として標準的な位置づけをしている。事実、“*Premśāgar*” や “*Bāgh o Bahār*” においてはひんばんに見られるところである。なお、PG にはこの形は見られない。Kāmtāprasād Guru も Platts や Pin と同じくこれを不定詞形と並び tū, tum の未来命令形としている。(Hindī Vyākaraṇ, Kāśī, Vi. 2017, p. 287)
- (44) Pin はこれをアオリストが助動詞をとったものとし、学習者の参考までに述べるものであって推奨するものではない、とする。習慣過去時制形はアオリストが助動詞の過去形を従えたものである。(p. 138) HM には一作品にのみこれが見られるが、いわば方言臭を出すために例外的に用いられたものである。calo rānī jī bulāwāī hai (p. 124), kyō cal merī jī dukhāwāī hai (p. 163) これはすでに Fort William College の諸テキストにも殆ど見られなくなっており、次のような例は稀なものである。jahā haribhakt yah kathā sunāwē hai tahā hī sab tīrth au dharm āwē hai (Vrajratnadās (ed.), *Premśāgar*, Vi. 2010, p. 6) また Inṣā Allāh Khān は、“*Daryā-ē-Laṭāfat*” (1808) において、「洗練された言葉を話す」と自称しているデリーの一部分の人たちがこの現在時制形を用いるが、真に洗練されたのはもう一つの形（現在分詞＋助動詞）である、と述べている。(‘Abd ul-Haq (murattab), *Daryā-*

ĕ-Laṭāfat, Aurangābād Dakkhin, 1933, pp. 191-2)

- (45) 今日、この反復動作を表わす複合動詞は完了時制形で表わされないのが普通である。DJ にもこれが完了時制形に用いられた例はない。しかし、当時のものにはかなり多くの例が見られるし、Pin (p. 163) などにも記述されている。āśālatikā bārambār murjhā jāyā ki (AK, 3, 1-2, p. 3) unke ācaraṇ aur svabhāv to sadā hī se sarvathā hamāre pratikūl rahā kiye hai (AK, 1-6, p. 30)
- (46) 当時、この形は一般的であった。これに従い直説法未来時制形でも KB と異なる。samjhā karāi (PG, p. 91), dewai (AK, 1-3, p. 9), jaisā karm karaigā waisā phal pāwaigā (HM, p. 43)
- (47) -w- のかわりに -y- がそう入されることもある。jitne candramā ke darśan hoyā (HM, p. 125): ho jāyāgi (PG, p. 77) なお、Inšā Allāh Khān は -w- 及び -y- の両形を示しているが、lewe や lewē よりも le, lē のほうを一層標準的な形としている。(前掲書, pp. 192-4)
- (48) DJ の副詞を若干例示する。bahut, ziyādah, ab, ab hī, jab, tab, jab kabhi, kabhi kabhi, nit, sadā, roj roj, kal, parsō, jaldi hī, pahile, bāhar, ūpar, āge, yahā, wahā, jahā, kahā, idhar, udhar, yō, kyō, jūhī, utte, jī, hāji, nahī, na, nā, mat
- (49) このような面は同時代の他のものについても多少の差はあれ、見られるところである。āp ke barō ki badaulat (PG, p. 143), haisiyat ke bamūjib (PG, p. 14), shimbhūdayāl ke kahne mūjab (PG, p. 94), sāthiyō samet (PG, 16), parā bhakti ki apekṣā (HM, p. 7), unki śikṣā ke nimitt (HM, p. 10), dūsre dharm kabnewāle ke thik barkhilāf (HM, p. 198), janm paryant (HP, 4-4, p. 3), rojgār ki killat ke bāis (HP, 4-6-7, p. 7)
- (50) VA には be- の次のような用例がある。be khurdbin śisā lagāye (p. 18), be haḍḍi ke jānwar (p. 18), be khāye (p. 15) PG にも同種の例が見られる。be samjhe būjhe (p. 63), be dekhe bhāle (p. 64) このような前置詞的用法も今日のヒンディーでは標準的なものとされないが、DJ にはこの種の用例は見られない。
- (51) たとえば、Rādhākṛiṣṇadās, Du:khini Bālā (Banāras, 2 nd ed. Vi. 1939) に見られる次のような例からもこの時期の KB Hindi の特徴が窺われるであろう。()内はページ。
mere buddhi mẽ (5), āp logō ke sevā mẽ (2), kyā mūrkhṭā kiyā (9), kyō unko santān nahī hotā? (3), hamāre darśak jan (1), sab bāt aisi hōy ki... (2), kaun kaun si bātē bāpdādā ki karte hai (4), jo bāp dāde karte āye hai (6), bāpdadō ki bāt (6), ye sab āpattiyē hotī (3), striyē sati hoti thī (4), hindustāni bastuē (4), āpus mẽ (3), kyā tū isi daśā mẽ rahaigā (8), āj tak kisi ne na kiyā hoy (2), we log āwē (2), inke kahe se kā hot hai (5), prān (prāṇ) dene se kyā lābh (12), siwā (7), sewāy (6), apni iccānusār (8), jāke pair na phaṭe biwāi, so kā jāne pir parāi (10), apne dās ke utsāh vardhanārth isko sādhar grahaṇ kiyā (2).